思案の敗北

太宰治

ほんとうのことは、あの世で言え、という言葉がある。まことの愛の実証は、この世の、人と人との仲に於いては、ついに、それと指定できないものなのかもしれない。人は、人を愛することなど、とても、できない相談ではないのか。神のみ、よく愛し得る。まことか？

みなよくわかる。君の、わびしさ、みなよくわかる。これも、私の傲慢（ごうまん）の故であろうか。何も言えない。

中谷孝雄氏の「春の絵巻」出版記念宴会の席上で、井伏氏が低い声で祝辞を述べる。「質実な作家が、質

実な作家として認められることは、これは、大変なことで、」語尾が震えていた。

たまに、すこし書くのであるから、充分、考えて考えて書かなければなるまい。ナンセンス。

カントは、私に考えることのナンセンスを教えて呉(く)れた。謂(い)わば、純粋ナンセンスを。

いま、ふと、ダンデスムという言葉を思い出し、そうしてこの言葉の語根は、ダンテというのではなかろうか、と多少のときめきを以て、机上の辞書を調べた

が、私の貧しい英和中辞典は、なんにも教えて呉れなかった。ああ、ダンテのつよさを持ちたいものだ。否、持たなければならない。君も、私も。ダンテは、地獄の様々の谷に在る数しれぬ亡者たちを、ただ、見て、とおった。

人は、人を救うことができない。まことか？

何を書こうか。こんな言葉は、どうだ。「愛は、この世に存在する。きっと、在る。見つからぬのは、愛の表現である。その作法である。」

泣き泣きＸ光線は申しました。「私には、あなたの胃袋や骨組だけが見えて、あなたの白い膚が見えません。私は悲しいめくらです。」なぞと、これは、読者へのサーヴィス。作家たるもの、なかなか多忙である。

ルソオの懺悔録のいやらしさは、その懺悔録の相手の、（誰か、まえに書いたかな？）神ではなくて、隣人である、というところに在る。世間が相手である。オーガスチンのそれと思い合わせるならば、ルソオの汚さは、一層明瞭である。けれども、人間の行い得る

最高至純の懺悔の形式は、かのゲッセマネの園に於ける神の子の無言の拝跪（はいき）の姿である、とするならば、オーガスチンの懺悔録もまた、俗臭ふんぷんということになるであろう。みな、だめである。ここに言葉の運命がある。

　安心するがいい。ルソオも、オーガスチンも、ともに、やさしい人である。人として、能うかぎり、ぎりぎりの仕事を為した。

　私は、いま、ごまかそうとしている。なぜ、ルソオの懺悔録が、オーガスチンのそれより世人に広く読ま

れているか、また読まれて当然であるか。

答えて曰(いわ)く、言うだけ野暮(やぼ)さ。ほんとうだよ、君。

宿題ひとつ。「私小説と、懺悔。」

こう書きながら、私は、おかしくてならない。八百屋の小僧が、いま若旦那から聞いて来たばかりの、うろ覚えの新知識を、お得意さきのお鍋(なべ)どんに、鹿爪(しかつめ)らしく腕組して、こんこんと説き聞かせているふうの情景が、眼前に浮んで来たからである。けれども、とまた、考える。その情景、なかなかいいじゃないか。

どうも、ねえ。いちど笑うと、なかなか、真面目な顔に帰れないもので、ねえ、てのひらを二つならべて一掬（きく）の水を貯え、その掌中の小池には、たくさんのおたまじゃくしが、ぴちゃぴちゃ泳いでいて、どうにも、くすぐったく、仁王立ちのまま、その感触にまいっている、そんな工合いの形である。

いままで書いて来たところを読みかえそうと思ったのであるが、それは、やめて、（もう笑ってはいない。）私の一友人が四五日まえ急に死亡したのであるが、そ

のことに就いて、ほんの少し書いてみる。私は、この友人を大事に、大事にしていた。気がひけて、これは言い難い言葉であるが、「風にもあてず」いたわって育てた。それが、私への一言の言葉もなく、急死した。私は、恥ずかしく思う。私の愛情の貧しさを恥ずかしく思うのである。おのれの愛への自惚(うぬぼ)れを恥ずかしく思うのである。その友人は、その御両親にさえ、一ことも、言わなかった。私でさえこんなに恥ずかしいのだから、御両親の恥ずかしさは、くるしさは、どんなであろう。

権威を以(もっ)て命ずる。死ぬるばかり苦しき時には、汝(なんじ)の母に語れ。十たび語れ。千たび語れ。

千たび語りても、なお、母は巌(いわお)の如く不動ならば、――ばかばかしい、そんなことないよ、何をそんなに気張っているのだ、親子は仲良くしなくちゃいけない、あたりまえの話じゃないか。人の力の限度を知れ。おのれの力の限度を語れ。

私は、いま、多少、君をごまかしている。他なし、君を死なせたくないからだ。君、たのむ、死んではな

らぬ。自ら称して、盲目的愛情。君が死ねば、君の空席が、いつまでも私の傍に在るだろう。君が生前、腰かけたままにやわらかく窪（くぼ）みを持ったクッションが、いつまでも、私の傍に残るだろう。この人影のない冷い椅子は、永遠に、君の椅子として、空席のままに存続する。神も、また、この空席をふさいで呉れることができないのである。ああ、私の愛情は、私の盲目的な虫けらの愛情は、なんということだ、そっくり我執の形である。

路を歩けば、曰（いわ）く、「惚（ほ）れざるはなし。」みんなのや

さしさ、みんなの苦しさ、みんなのわびしさ、ことごとく感取できて、私の辞書には、「他人」の文字がない有様。誰でも、よい。あなたとならば、いつでも死にます。ああ、この、だらしない恋情の氾濫（はんらん）。いったい、私は、何者だ。「センチメンタリスト。」おかしくもない。

ことしの春、妻とわかれて、私は、それから、いちど恋をした。その相手の女のひとは、私を拒否して、言うことには、「あなたは、私ひとりのものにするには、よすぎます。」私は、あわてて失恋の歌を書き綴った。

以後、女は、よそうと思った。

何もない。失うべき、何もない。まことの出発は、ここから？（苦笑。）

笑い。これは、つよい。文化の果の、花火である。理智も、思索も、数学も、一切の教養の極致は、所詮、抱腹絶倒の大笑いに終る、としたなら、ああ、教養は、――なんて、やっぱりそれに、こだわっているのだから、大笑いである。

もっとも世俗を気にしている者は、芸術家である。
約束の枚数に達したので、ペンを置き、梨(なし)の皮をむきながら、にがり切って、思うことには、「こんなのじゃ、仕様がない。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房
1989（平成元）年6月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
初出：「文芸」
1937（昭和12）年12月1日発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2005年3月17日作成
2006年7月2日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。